



里山再生と共生

これまで、野生動物と人との敵対的な緊張関係が維持され、野生動物の捕獲が行われていた里山は荒廃し人の活動がなくなり、かつての賑わいがなくなってしまいました。そのため、里山はサルやシカ・イノシシがこれまでのように警戒する地域ではなく、安全に生息できる地域へと変わってしまった。耕作を放棄した田畠は藪になつて環境になつています。

サル・シカ・イノシシなどの増えすぎをさらに助長し、毎年200億円にも及ぶ深刻な農業被害に加え、當農意欲の減退とさらなる耕作放棄地の増大をもたらすなどの悪循環に陥っています。

鳥獣による被害に対して、追い払いや捕獲で解決するものではありません。

被害拡大の背景には、森の荒廃があると指摘されています。

人と野生動物が軋轢なく共生し自然環境の恩恵を享受するためには、人も時間もかかると思いりますが動物のエサとなりうる実をつける木を植えるなどして、森の再生をはかり、野生動物との長期的な共生の道を探らなければなりません。

時代よりも著しく低下しています。それに加え、バッハーゾーンの里山は江戸時代の面影は残っていません。

名張地域鳥獣害防止広域対策協議会のモンキードッグ9頭が参加し、市民の方々に紹介されました。

里山再生と共生

江戸時代の獣害対策

</div